幼児・児童・生徒に関わるすべての教員のための

# ポジティブな行動支援

## 実践事例集Ⅰ

## 「できたらいいな」を「やってみた!!」

ポジティブな行動支援は、学校・園で「いつでも、だれでも」実行可能です。
この事例集は、あなたのポジティブな行動支援との出会いのきっかけになればと思って制作しました。

ポジティブな行動支援を「もうやっているかもしれない」あなたも、
「これからしてみようと考えている」あなたも、
「できたらいいなと思っている」あなたにもぜひ読んでいただきたい内容です。

令和3年3月　徳島県教育委員会

## はじめに

本パンフレットは、徳島県の学校・園で取り組まれたポジティブな行動支援（PBS）の実践事例を紹介しています。

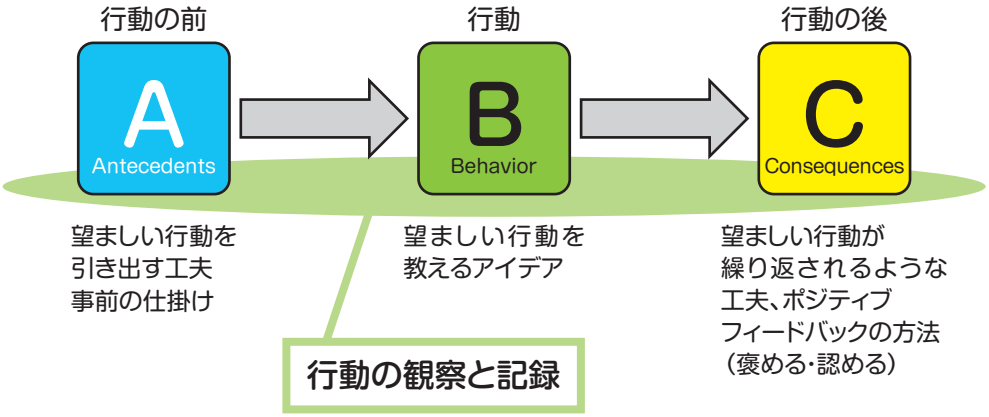
ここで紹介させていただく学校・園は、皆さんの所属校・園と同じような課題を持ち、それに対してポジティブな行動支援の手法を用いて、その解決を図った学校・園です。実際にどの学校・園でも気軽にポジティブな行動支援の考え方を取り入れていただけるように、幼児・児童・生徒からどのように望ましい行動を引き出せばよいのか、また褒めたり・認めたりするためにどのような方法があるのか、具体的な事例をもとに大事なエッセンスをとりだしています。

そのエッセンスの中から、あなたの学校に似合うぴったりサイズの事例、これは使えそうというヒントなどを見つけていただければ幸いです。

## 事例集のもくじ


ポジティブな行動支援の考え方について―2･3･4ページ


本事例集は、主に望ましい行動が起きるための3つの工夫を中心に収集しています





望ましい行動を「引き出す」工夫･手立て（A）―5･6ページ

望ましい行動を教えるアイデア（B）―7･8ページ

望ましい行動へのポジティブなフィードバック（C）―9･10･11ページ

行動を観察して記録する―12ページ

「授業づくりにポジティブな行動支援を!」―13･14ページ

「校内支援体制づくりにポジティブ行動支援を!」―15･16ページ

実践者のページ「あなたは何にポジティブな行動支援を用いましたか?」―17･18ページ

### after

**ポジティブな行動支援実践校･園の様子から**

1. まず幼児･児童･生徒の望ましい行動に注目するようになり、承認･称賛する機会が増えます。結果、信頼関係が深まります。
2. 教員間で幼児･児童･生徒について、ポジティブな文脈での情報交換が盛んになります。
3. 幼児･児童･生徒の指導上の課題に直面しても、代わりとなる望ましい行動を見つけ、その行動を増やすことで、課題を乗り越えられることが増えます。
4. もうすでにポジティブな行動支援をしていた教員が、自身の指導に自信を深めます。そして人材育成にも役立ちます。

### before

**生徒指導上の悩み**

自信がもてない児童･生徒が多い
問題行動が多い

**授業の中での悩み**

ノートをとらない児童･生徒がいる
発問しても挙手が少ない
学習の準備ができない

**学級経営の悩み**

話が聞けない
クラス内で緊張や不安が強い
整列など行動に時間がかかる

**校内体制上の悩み**

幼児･児童･生徒の課題に対して、学校･園内で連携が深まらない
褒めたり･認めたりすることが大事と思っていてもコンセンサスが得られない

## 教員の「願い」を実現する

学習指導、生徒指導、学級経営、特別活動、人権教育、部活動など、学校現場は、すでにたくさんの「やるべき」ことがあります。

ポジティブな行動支援は、それら活動のいずれにもなじむ考え方です。またそれらの活動を通して、幼児・児童・生徒との信頼関係も強くすることが可能です。

先生方の「こうしたい」という目的を形にするだけでなく、「このようにありたい」という教員としての希望や理想の実現にも必ず役に立ちます。

## はじめは「できているところ探し」

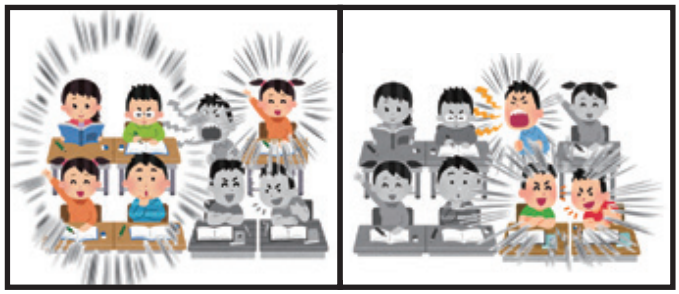
学校現場においてポジティブな行動支援に取り組む時、「子どもたちのポジティブな行動を見つける」ことがとても大切になります。

例えば、授業開始時刻になっても数名の子どもたちが席に座らなくて、授業がなかなか開始できない場面を想像してみましょう。先生方の中には、「授業始めるよー早く座りなさい!」と最初に大声を出すことが習慣になっている方もいらっしゃいます。

そのとき、教員の視野に入っているのは「走り回っている子ども」だけかもしれません。でも実は、数名の子どもの横では、大半の子どもたちが授業準備もでき、席に座って授業の始まりを待っているのです。視野が狭くなってしまうと、目の前にあるはずの「ポジティブな行動」が見つからなくなってしまうのです。

ポジティブな行動支援は、まずは「すでにできているところ」を見つけ出し、褒めることからはじまります。

すると、子どもたちも達成感を感じながら、さらにポジティブな行動を増やしていき、それをまた褒めて、認めることができるようになります。プラスのサイクルが回り始めるのです。



「できているところ」に注目　「できていないところ」ではなく…

## 教室は「できていること」にあふれている

先生方の視野を広げ、子どもたちのできていることを見つけていくには、いくつかのコツがあります。

一つは、「何を**してほしくない**か」ではなく「何を**してほしい**か」という考え方をすることです。子どもたちにできるようになってほしいと期待する姿を考え、それができている「子ども」、それができている「場面」などを捉えていくのです。学校全体で作成した『行動目標設定表※』なども参考になります。

また、「期待する姿を細かく分解してみる」ことも有効です。例えば、「授業に参加する」ということは、①教室に入る、②席に座る、③先生の話を聞く、④プリントに取り組む…などの細かな行動から構成されていることが分かります。

このように細かく考えてみると、「私語が多くてなかなか授業参加できない子ども」がいたとしても、実は、①授業時間には教室には戻ってきている、②席に座っている、③授業に必要なものは机の上においてある、④先生の発問に答える時もある、⑤プリントを配るとすぐに取り組み始める…など、すでに「○(まる)」が付けられる行動がたくさんあることに気づきやすくなります。

このようなコツを参考に、改めて教室を見てみてください。きっと、教室は子どもたちの「○(まる)」であふれていることに気づくと思います。

執筆　野田　航（大阪教育大学准教授）

よく見れば、教室の中は子どもたちの「できていること」であふれている

注）『行動目標設定表』…全校や学年などでPBSに取り組むときに幼児児童生徒をどのように育てるのかという方向性や具体的な目標が書かれた表（詳しくは「特別支援まなびの広場」を検索）

## ポジティブな行動支援の基本

ポジティブな行動支援に取り組むにあたって、まず行動の原理を知っておくことが必要です。

行動は、①行動の前のきっかけ、②行動、③行動の後の結果という3つの枠組みから捉えると、「なぜそのような行動が起こるのか」を理解しやすくなります。左図に示した例のように、授業中の「立ち歩き」という行動は、苦手な算数の時間に頻繁に起き、また立ち歩くことで結果として算数の課題に取り組まずに授業時間が終わったということがあるとします。

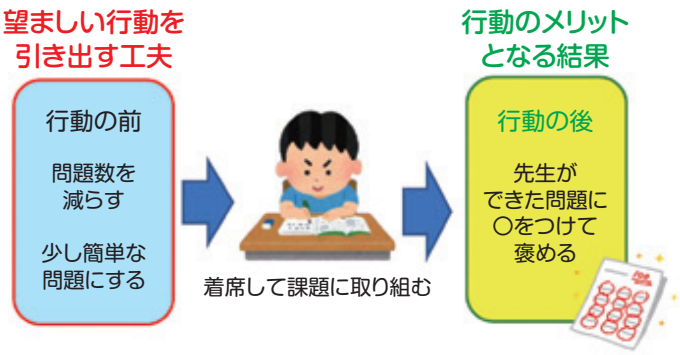
行動の理由は行動を見ているだけでは理解しづらいのですが、こうして行動の前と後に目を向けることで、行動がどのような状況下で起こりやすいのか、またどのような結果になっているからその行動が維持されてしまっているのか、ということが見えてきます。この例の場合は、苦手な算数の課題から逃れるための行動と理解できます。

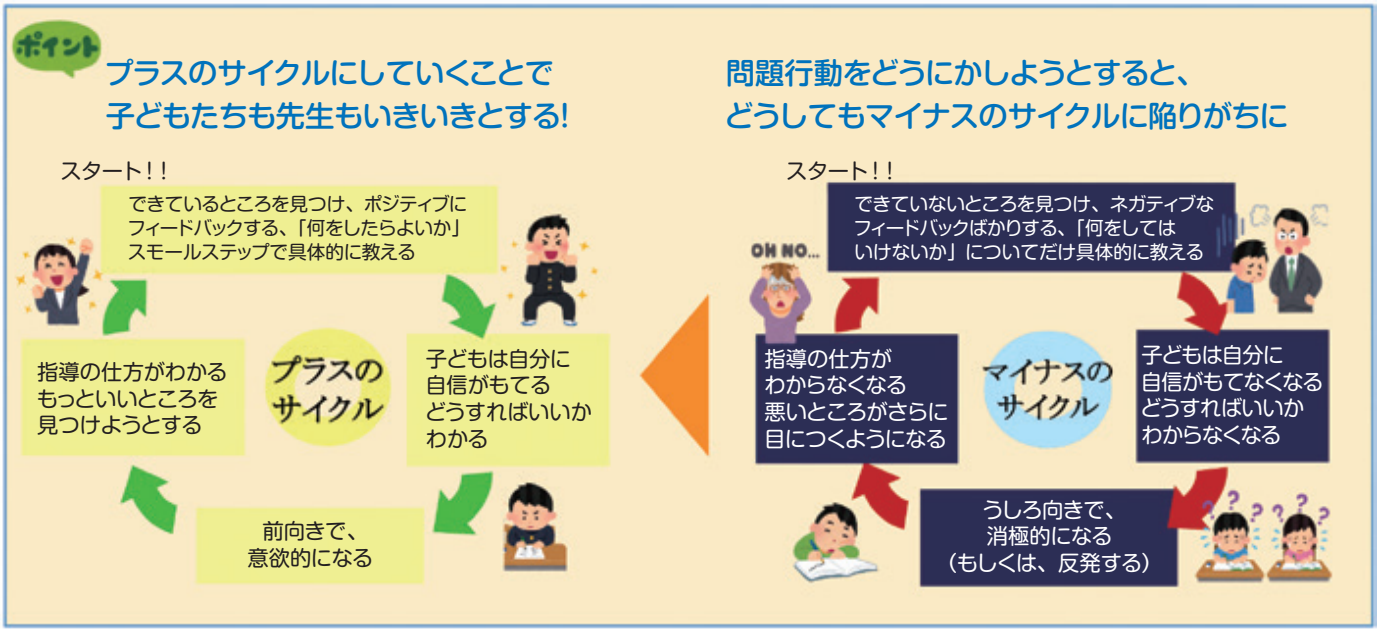
行動に本人にとって「メリット」となる結果が伴う場合、その行動は増えます。つまり前述の例では、立ち歩くことが「算数をせずに済む」という「メリット」に繋がることで増えていたと理解することができます。

### 行動を理解するための3つの枠組み

ポジティブな行動支援で望ましい行動を増やす際には、この原理を応用します。まず増やしたい「望ましい行動」を具体的に設定し幼児・児童・生徒に教えます（Bの手立て）。この例の場合だと、「立ち歩き」に代わる望ましい行動は「着席して課題に取り組む」ということになります。増やしたい望ましい行動が決まれば、次にその行動が引き出されやすくなるような工夫を行動の前に設定します（Aの手立て）。例えば、本人が課題に取り組もうと思えるように問題数を減らしたり、課題を少し簡単にしたりするなどの工夫ができるでしょう。

そのような設定の工夫により望ましい行動が見られたら、その行動に「メリット」をくっつけて望ましい行動が増加・維持するようにします（Cの手立て）。花丸をつけたり、褒める言葉かけをしたり、連絡帳で保護者の方に報告したりと、子どもが喜ぶ、また頑張ろうと思えるような工夫をしましょう。




執筆　大対　香奈子（近畿大学准教授）

◀次ページから具体的な事例の紹介です

## 記録をとって、子どもの伸びを確かめる

ポジティブな行動支援を進めていく上で欠かせないことの一つが、子ども達が本当に伸びているのか、取り組み前と取り組み後に「記録をとって確かめる」ということです。ポジティブな行動支援を行ったとしても、最初は子ども達の変化は小さなものかもしれません。そのような子ども達の小さな変化を見落とさないために、記録をつけることはとても役立ちます。

また、記録をつけておくと、子ども達がどれだけ伸びたのかが「見える化」され、これを子ども達とも共有することで、成長を一緒に喜びあうことができます。これによって、子ども達の望ましい行動はさらに伸びていきます。

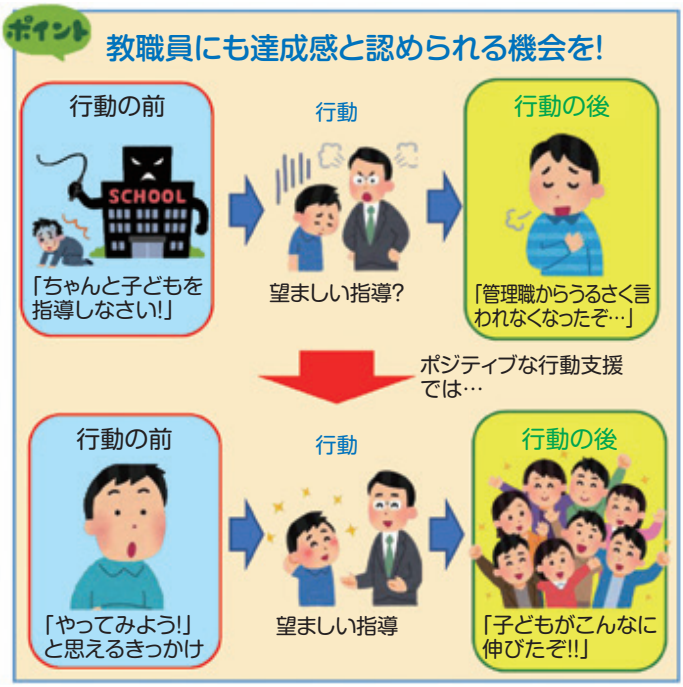
「記録をつけるって大変そうだな…」と思われるかもしれませんが、手軽にできることからで大丈夫です。例えば、学習の準備ができている子どもの人数を数えてみる、チャイムが鳴ってから全員が着席するまでの時間を測ってみる、などを週に2、3回行ってみるだけでもかまいません。ポジティブな行動支援を続け、子ども達の伸びを示す記録を振り返った時、記録をつけていなかった時よりも、はるかに大きな達成感を得ることができるはずです。

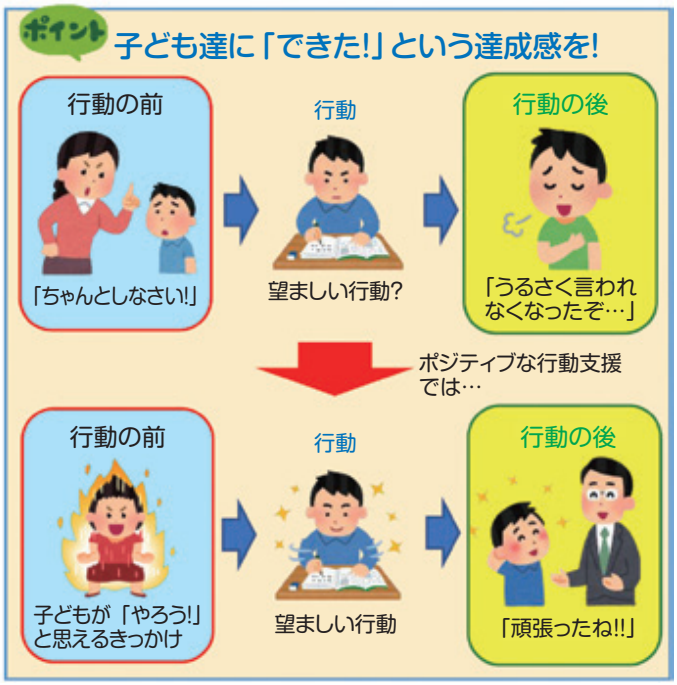
## 教職員にも達成感を！

ポジティブな行動支援では、子どものできている行動を見つけ、積極的にそれを認め・褒めていくことで、子ども達の「やった！」「できた！」という達成感に繋げていきます。しかし、ポジティブな行動支援を続けていく上で、それと同じくらい大切なのが、教職員の「やった！」「できた！」という達成感です。学校現場で日々奮闘している教員は誰しも、「できていること」「頑張っていること」ばかりです。しかし、この「できていること」「頑張っていること」が認められる機会・称賛される機会は、残念ながら今の教育現場ではあまり多くありません。「まったくない！」という先生方もいるでしょう。

ポジティブな行動支援ではこのような状況を改善し、教職員同士でも、お互いに「できていること」「頑張っていること」を見つけ、称賛することを重視します。「教室内のポジティブな行動支援」の前に、「職員室内のポジティブな行動支援」が大切なのです。

例えば、まずは月一回、十分間でも良いので、学年・学校で共通の行動目標に向けて、各教員が取り組んでみたことについてグループで紹介しあうのも良いでしょう。改善点について指摘し合う前に、まずは忙しい中でも取り組んでみたこと自体や、取り組みのよい点についてお互いに認め合うことが大切です。日々のコミュニケーションの中でも、お互いのよいところに気づき、それを言葉にして伝え合うように意識してみましょう。




執筆　庭山　和貴（大阪教育大学准教授）

## 児童が参加する仕掛けを校内に複数作り、よい行動が起こりやすくする

**岩倉小学校**では、「岩倉っ子 ホップ・ステップ・スマイル大作戦！」に学校全体で取り組んでいます。本年度は、まずはじめに「いつでも、どこでも、自分から元気にあいさつをしよう」を目標に取り組みました。

同校では、三名の教員が中心となって、全教職員でこのプロジェクトを進めました。左の図は、中心となった教員の役割分担です。

**あいさつをする場所の設定**

岩倉小学校では、スマイルロード（校舎前）、スマイルゾーン（吹き抜け玄関）、スマイルポイント（教室入口）を、児童たちがあいさつをする場所として指定しました。あいさつをする場所が三カ所に増えたので、練習回数が自然と増加し、よりあいさつをする児童が増えました。あいさつのタイミングもはかりやすくなりました。

**岩倉小学校のポジティブな行動支援推進体制**

【3年担任・研修主任】
- 研修企画，外部との連絡調整

【5年担任・児童会担当】
- 児童会をまきこんだ仕掛け作り，実施時の調整
- 職員プチミーティングの司会
- モデリング動画づくり

【特別支援教育コーディネーター】
- 取組についての計画案のとりまとめ
- 職員プチミーティングの司会
- 仕掛けの企画

3カ所のあいさつをするエリア

## 配席の工夫によって、望ましい行動を広がりやすくする

池田第一保育所や池田幼稚園を含む池田小学校区四園では、子どもたちが池田小学校に入学するまでに、「話を聞く力」を育成したいとポジティブな行動支援を保育に採り入れています。

幼児たちの反応の様子をよく観察し、話し手の方をすばやく見る、今自分がしていることを止める、正確に聞き取ってすぐ行動に移すなどの「話を聞く行動」が身についている幼児をモデルとしてほかの幼児が模倣しやすくなるように、配席を工夫しました。

**池田第一保育所**では、各テーブルごとにモデルとなる幼児を配席し、すばやく行動に移せるようにしました。他人のよい行動を真似ることを奨励するとともに、幼児同士の声の掛け合いも奨励しました。

**池田幼稚園**では、行動のモデルとなる幼児をできるだけ教室の前方へ配席して、モデルが自然と幼児らの視野に入るようにしました。このように学級全体の様子を見ながら、席を工夫することで望ましい行動が起こりやすい環境を設定します。

池田第一保育所での配席の工夫
各テーブルにモデルとなる幼児を配席

池田幼稚園での配席の工夫
教室前方にモデルとなる幼児を配席

## 保育者が幼児の気づきを促し、待つことで適切な行動を引き出す

**かめの子保育園**においても、子どもたちが池田小学校に入学するまでに、「話を聞く力」を育成したいとポジティブな行動支援を保育に採り入れています。

かめの子保育園年長組では、保育者が話を始める前に、幼児たちに今から話が始まることが伝わるように、保育者が十秒程度沈黙して、幼児たちに気づきを促しています。保育者は全員が気がつくのを確認してから、話を始めます。

練習を繰り返すことで、数秒で気がつくようになりました。

保育者が話を始めようとしています。
まだ、幼児たちは気がついてません。

全員が気がつき、保育者の方を見ています。

「お話を聞きましょう！」と注意するよりも、人の話を聞くときのやり方を伝え、繰り返し練習することで、保育者は幼児たちの適切な行動を引き出すことに成功しました。

池田小学校区の情報共有会では、この指導方法を「沈黙テクニック」と名付け、他の園でも幼児たちの実情に合わせて採り入れています。保育者（教員）が話を始める前の何気ない工夫ですが、これを積み重ねることで、「（保育者の方を）見てくれてありがとう。」、「お話ししやすいです、うれしいな。」などと、さわやかに話を始めることができます。また、幼児たち同士でも気づきを促すように声を掛け合うような姿も見られています。

## 何が望ましい行動なのか、児童たちと一緒に目標を考える

**昼間小学校**では、六年生が主体となって「ひるまっこチャレンジプロジェクト」に取り組んでいます。このプロジェクトの特徴は、活動内容や活動方法を六年生児童が主体となって考えることにあります。まずはじめに左表に示す、三つの大切や具体的な行動目標を児童同士の話し合いで決め、「がんばりポイント表」として、学年で共通理解しました。

がんばりポイント表
ひるまっこ　チャレンジ　プロジェクト（2020）

| | 3つの大切 | | |
|---|---|---|---|
| | きまりを守ろう | 人の話を聞こう | 礼儀正しくしよう |
| 授業中（集会・行事） | ・チャイムが鳴ったら着席し、静かに待とう。 | ・人の目を見て、話を聞こう。<br>・静かに話を聞こう。 | ・姿勢を正しくして、元気よくあいさつをしよう。（学習のはじめとおわり）<br>・友達の発表を聞 |
| 休み時間 | ・次の時間の学習準備をしておこう。<br>・トイレのスリッパをそろえよう。<br>・ろうかは右側を歩こう。 | ・校内放送を静かに聞こう。 | ・「ありがとう」「ごめんね」などやさしい言葉を使おう。 |
| 登下校時 | ・横断歩道は手をあげてわたろう。<br>・通学路を通って登下校しよう。 | ・交通指導員、立哨の人、警察の人の指示を聞こう。 | ・地域の人に自分からあいさつをしよう。<br>・相手の顔を見て、あいさつをし |
| 給食・そうじ | ・静かにそうじをしよう。<br>・給食は静かに食べよう。 | | |

その上で、児童が取組を進めやすいように、「委員会活動」の枠組みを使って、児童を組織化しました。委員会ごとに目標を定め、児童たち自らが目標達成のための手立てや、方法を考えました。

「がんばりポイント表」話し合いの様子

自分からあいさつをしよう。（体育・栽培委員会）
次の時間の学習準備をしよう。（広報・ハッピー委員会）
トイレのスリッパをそろえよう。（すこやか・給食委員会）
小学校をきれいにしよう。（図書委員会）

六年生は主に「総合的な学習の時間」を使って、計画や事前準備を行いました。

各委員会では、児童たちが意見を出しながら、活動をはじめました。教員は、必要に応じて助言やサポートをしたり、校内での調整を行ったりしました。また、児童が活動する時間もできるだけ確保しました。児童と学校の方向性について話し合い、活動の意味を伝えながら、児童から出てくるアイデアを大切にして、既存のシステムを最大限活用して、取組を進めています。

## キャラクターなどを設定して、望ましい行動のポイントを意識しやすくする

**加茂小学校**では、KSP（かもっこスマイルプロジェクト）の一つとして六年生を中心に「すてきなあいさつをしよう」の取組を進めています。あいさつのポイントを明確化し、それぞれのポイントに児童らが考案したキャラクターを設定して取り組んでいます。

「すてきなあいさつをしよう」の取組で用いられている掲示物　それぞれのポイントが示されている

これらのキャラクターは、掲示物や六年生児童らの広報を通して、児童に浸透しており、よいあいさつのための三つのポイントがわかりやすくなっています。

また、児童の意見やアイデアを積極的に取組に採り入れることによって、児童の主体性ややる気も引き出すことにつながっています。

話し合って準備をする児童たち

## 行動のポイントを合言葉にして、日常生活の中で繰り返し練習する

**芝生小学校**では、一年生を中心に校区内の三野認定こども園との間で、「人の話を聞くことができる」ことを目標に決め、ポジティブな行動支援の手法を幼ー小連携に活かす取り組みを進めています。

正しい姿勢をすることにより、話を聞く体勢を整えることにしました。また、毎日の学校生活のあらゆる場面で、話を聞く練習をしていきました。

児童が自分たちで「あしぺた・ぴん」と合言葉を言いながら、姿勢を整える様子が見られます。

合言葉は手を止めたり、話し手に注目したりと「人の話を聞く」行動を起こすきっかけになりました。

合言葉でポイントを焦点化し、繰り返し練習することで、児童や幼児は、話を聞く行動のスキルを身につけることができました。

### わかりやすく教えることも重要!

はじめは「適切な姿勢」が、児童や幼児には伝わりにくいので、実際にどのような姿勢が合言葉の「あしぺた（背筋）ぴん」なのか、視覚的な提示もしながら具体的な行動を教えています。

**三野認定こども園**でも、幼小の「段差」を低くするため、芝生小学校の一年生と同じ目標で実践しました。

「あしぺた・ぴん」は三野認定こども園の幼児たちにもわかりやすく、椅子に座る場面で、合言葉を言いながら、進んで姿勢を整える様子が見られました。話を聞いたり、話し手に注目したりする行動も増えました。

合言葉で姿勢を整える練習をしている場面

## 事前に「頑張りどころ」を明確に伝えて、適切な行動を引き出す

**池田幼稚園**では、池田小学校が取り組んでいる「池小生活スタンダード」を参考に幼小接続を意識して、ポジティブな行動支援の考え方を日常の保育に採り入れています。

具体的には、幼児たちが行動をする前には、明確な指示を出したり、事前に頑張りどころを伝えたりしています。

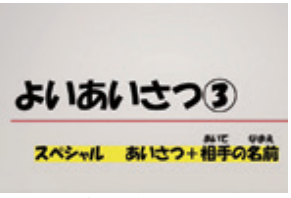
例えば、「整列すること」や「あいさつをすること」も、必要に応じて毎日の園生活の中で練習します。

事前に説明している場面
（上・下とも）

## モデリング動画を制作し、望ましい行動を具体的に教え、練習する

**岩倉小学校**では、児童会児童や児童会担当教員を中心に、全校児童にモデルとして見せるモデリング動画を制作しました。

制作では、児童会の児童が出演し、放課後に撮影を行いました。動画は、一本目は「よいあいさつのポイントを伝え、練習する」、二本目は、「あいさつの種類やあいさつゾーンなどの紹介」という内容で制作しました。全学級で視聴し、実際に練習しました。よく知っている上級生が出演していたこともあり、とても集中して見ていました。




モデリング動画の内容

撮影の様子

あいさつのポイント紹介

あいさつの仕方の解説

練習セッション

モデリング動画の視聴

池田幼稚園でも、池田小学校一年生の話の聞き方を行動のモデルにするべく、普段の授業の様子を撮影して、モデリング動画として活用しました。

動画は効果大で、くつをそろえるなど、目的以外の行動にも広がりました。

モデリング動画視聴の様子

他の行動にも広がる

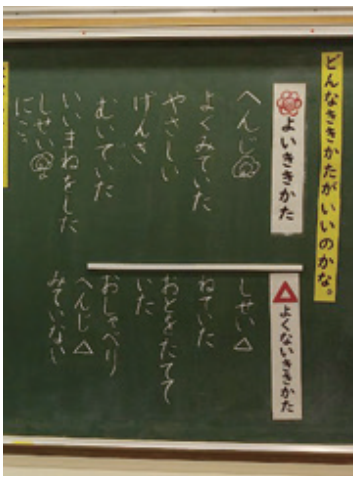
## 授業の中で「望ましい行動」を教え、意味を伝えて、実際に練習する

**脇町小学校**では、低・中・高学年がそれぞれ行動チャートを作り、学校全体でポジティブな行動支援に取り組んでいます。

脇町小学校一年松組では、望ましい行動の一つである「話の聞き方」について教えています。

教員によるモデリング（悪い例）

教員によるモデリング（よい例）



児童から出た意見を板書したもの

まずはじめに、教員のモデリングを見て、「話の聞き方」の悪いところ、よいところに着目し、「よい聞き方の具体的なポイントを確認します。

また、望ましい行動を学ぶ意味について、考えるように促します。

次にひまわりの花が太陽の方を向くことを想起させます。

話す人を「太陽」、聞く人を「ひまわり」に見立てて、実際に練習を行います。

教示用スライドの一部

教示用スライドの一部

練習場面では、たくさんの意欲的な児童たちから手が挙がり、話す人に素早く身体を向けて、聞く姿勢になることができていました。

話者に注目する練習場面

適切なやり方を教え、繰り返し練習することで児童たちが望ましい行動を理解し、自信を持ってできるようになります。

## すでに「望ましい行動」ができている児童をモデルに行動を広げる

**加茂小学校**では、令和元年度に六年生児童をモデルに「集中そうじ」のプロジェクトに取り組みました。六年生は二つのことでモデルになりました。

**①「六年そうじの見学ツアー」（見て感じる）**

六年生児童の掃除に向かう真剣な態度を感じたり、道具の丁寧な使い方や掃除の効率的な仕方を見て学んだりするために、学年・学級単位で「見学」に行きました。下学年の児童たちは六年生児童の真剣な態度に引き込まれていました。

**②「ほかの学年と一緒にそうじ」（協働して学ぶ）**

各学年へ六年生児童が一名ずつ交代で行き、一緒に掃除しました。六年生がお手本となって、下学年とともに掃除をすることで、ほかの学年の児童も一生懸命に取り組みました。

## 給食放送や朝会など、校内の既存のシステムを活用して称賛を行う

**加茂小学校**では、児童への称賛方法の一つに給食放送を活用しています。給食の時間、新型コロナウイルス感染症対策で教室はいつもにまして静かです。そこへ放送が始まりました。

「今日、六年生のAさんがみつけたあいさつマスターは、○年○組のBさんです。」するとBさんの学級では、喜びの声や拍手が起こります。Bさんは照れながらも、とてもうれしそうです。

「あいさつマスター」の紹介放送

給食放送のあと、よいあいさつを見つけた教員または六年生に呼ばれ、Bさんはあいさつマスターの認定シールをもらいます。放送で称賛され、放送を聞いていた人からも称賛され、認定シールをもらいます。

このようによい行動をしたらきちんと認められることは、どの児童にとっても重要です。

給食中、放送を聞いて喜び、拍手する児童たち

6年生から認定シールをもらいます

## 幼児や児童の「よい行動」をシール等を配付して記憶に残る褒め方をする

ポジティブな行動支援の実践校・園で有効であった称賛方法の一つに、シールやカードの配付、スタンプの押印があります。

言葉による称賛は、幼児・児童・生徒に対して最も頻繁に使われ、即座に対応できるので効果も高いのですが、時間とともに消えてしまう性質があります。

一方で、シールなど視覚刺激による称賛は、シールを用意するなどの手間がかかるものの、時間がたっても称賛されたことが消えず幼児・児童・生徒の記憶に残りやすい利点があります。

「がんばりノート」シールによる称賛（写真は三野認定こども園）

「グッドマナーチケット」の配付による称賛（写真は三好中学校）

さらにシールなどの視覚刺激による称賛は、記憶に残りやすいだけでなく、工夫次第では、記録の機能も持たせることができます。例えばカレンダーをシール台紙にして、行動がうまくできた日にシールを貼る、できばえに応じたシールを貼るなどすれば、それはもうオリジナルの「行動記録表」になります。

このように、称賛に用いながら、記録の機能も持たせることができれば、一石二鳥となります。

コツコツと貯めることを好む幼児・児童・生徒であれば、シール台紙を開くたび、たくさん貯まった自分のシール台紙を見て誇らしく思うでしょう。

## 机間指導の際に、丸付けを行い、児童の頑張りを即時に称賛する

**鳴門西小学校**では、全校でポジティブな行動支援に取り組んでいます。なかでも一年生では、授業中、特に机間指導場面でポジティブな行動支援の考え方を積極的に活かしています。

授業中、教員は赤ペンを持って、教室の中を隅々まで回り、児童がノートに記述していることや計算の過程、式や答えなど、さっと見取って、素早く丸をつけます。児童たちは教員が近くに来るとうれしそうに丸付けを見つめます。今、頑張っているところを即時に称賛してもらうことで、児童の授業中の意欲は高く保たれています。

さらに児童によっては簡単に意欲を引き出す言葉がけをしたり、さりげなくヒントを出したりします。児童個別の様子がよくわかるので、さらに詳しい説明が必要な場合は、黒板前に集まって教員から丁寧に説明します。

自分の考えを発表することに自信がない児童でも、机間指導で事前に丸付けをして、自分の意見が教員から認められていると、自信を持って発表することができることも増えました。

机間指導での丸付けの様子

黒板の前に集めて説明

## モデルとなる幼児を称賛して、望ましい行動が自然と起こるようにする

**大泉保育園**では、幼児たちに「保育者が話を始めたら、動きを止めて、保育者の方を見る」行動や「保育者が話を始めたら、自分の身体を保育者の方へ向ける」行動を教える際、ポジティブな行動支援の考え方を保育に採り入れました。

スモールステップで丁寧になぜそのようなことをするのか意味や、やり方を教えて練習をしました。

取り組む中で望ましい行動へのポジティブなフィードバックとして有効だったのは、「すでに適切な行動ができている幼児」や「いち早く適切な行動を行った幼児」を称賛することでした。

また称賛方法として、I（アイ）メッセージ（「みんながこちらを見てくれるので話しやすいです。ありがとう。」のような言葉がけ）や、YOUメッセージ（「すてきだね。」「いいね。」「すごい！」のような言葉がけ）のどちらも有効でした。

適切な行動をする幼児を探す

いち早く適切な行動を称賛

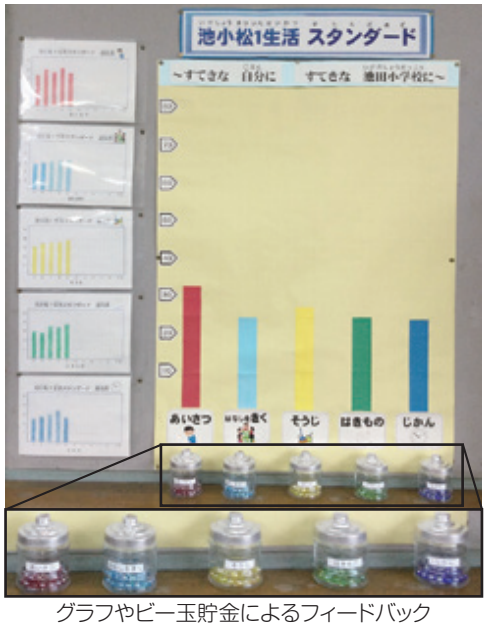
## 頑張った「過程」を称賛し、褒められた記録を蓄積できるシステムづくり

**池田小学校**では、「池小生活スタンダード」に全校で取り組んでいます。あいさつや話の聞き方、そうじなど五つの項目を目標に定め、児童の変化や伸びを記録しています。

しかし、グラフなどによる可視化されたフィードバックは、グラフの仕組みを未学習の児童にとって、わかりにくさを伴うこともあります。

そこで松一組（低学年の児童が在籍する特別支援学級）では、グラフで表記するだけでなく、同じシステムでビー玉貯金も実施しています。ビー玉は半具体物なので、「貯める」というイメージを持ちやすく、貯まっていく様子がフィードバックされやすい特徴があります。

松一組では、ビー玉がいっぱいになったら、児童と教員で相談して、特別なご褒美タイムを行うことにしています。ビー玉をためる過程を児童と教員で楽しみながら、池小生活スタンダードの指導を行っています。



グラフやビー玉貯金によるフィードバック

## モデルとなる行動を具体的に褒めて、模倣を引き出し、児童の行動を促す

**高川原小学校**では、授業改善のために専門家によるコンサルテーションを実施しています。その中で授業中に、適切な行動を行なっている児童を見つけたら、その行動をできるだけ即座に、具体的に称賛することに取り組みました。

具体的に称賛することで、その言葉がけが、他の周りにいる児童にとってはヒントや手がかりとなったり、模倣を促したりすることにつながりました。

具体的にどの行動がよかったのかを伝えることで、教員が何を「適切」と捉えているのか、明確になります。

また、具体的に称賛することで、授業の中で児童の理解や行動を「そろえる」働きがあることもわかりました。

以前の言葉がけ

いいね！
すばらしい！
やるなあ～

※称賛の意図は伝わりますが、何がよかったのか伝わりにくい。

ノートを書き始めるのが、早い！
もう1行書いているね。

おおっ。前の時間のノートを見て考えている。やるなあ。

現在の言葉がけ

## シールなどを配付する際は、できるだけ一人ずつ手渡しする

どこの学校・園でも子どもの「よい行動」や「頑張り」に対してシールやカードを渡して、称賛していると思います。

とても忙しい中なので、ついついシールを置いておき、「自分でシールを貼りましょう…」とやってしまいそうになるのですが、ここで一手間かけます。

**脇町小学校**では教員が一人ずつを呼んで、シールを手渡ししています。称賛の意味が深まり、効果が高まります。視線を合わせて、一声かけながら配付することがポイントです。

児童が称賛をどのように感じているのか、シールという称賛方法が有効かどうかも見極められます。

また、この方法は比較的年齢が高くなっても有効であることが、実践校での実践により報告されています。

子どもに一声かけて渡します

シールをもらう前は整列の練習に

シートにシールを貼る児童

写真は脇町小学校の1年生の様子

## 成長の過程を視覚化し、いつでも振り返りができるようにする

**岩倉小学校**では、事前のしかけに加えて、事後の工夫もしています。二つの写真は、「ホップ・ステップ・スマイル大作戦！」に取り組み始めたころ（上の写真・六月撮影）とキャンペーンが終了したころ（下の写真・九月撮影）の「あいさつの花（よいあいさつを称賛した掲示物）」です。

途中経過を確認する児童たち

自分や友だちが記入した花を読む児童たち

自分たちの成長の過程を「可視化（見てわかるようにする）」することで、児童たちが取組の深まりを実感するだけでなく、振り返りができたり、集団としての有用感を高めたりすることができました。

## 教職員の結束を生かして、「口コミ褒め」を行い、認められる機会を増やす

これらの会話は、**加茂小学校**のミーティングルームで休憩時間や放課後に交わされるものを抜粋したものです。ミーティングルームでは、お茶を飲みながら、教職員が情報交換をします。

特に児童らの善行や頑張っている様子、気になる児童のよい方向への変化などが情報交換されます。児童のポジティブな情報が担任に届きやすくなっています。担任自身が励まされると同時に、担任がミーティングルームで情報交換したことをもとに、さらに自分の学級の児童を称賛します。児童からすると、適切な行動をしたときだけでなく、行動のあとからも称賛される可能性が高まります。

さらにこの枠組みは家庭や地域にも広げることが可能です。

例えば、ある実践校では、児童がよいことをしたり、担任が児童を見てうれしかったこと、成長したと感じることを家庭へ電話しています。わずか一、二分間の電話ですが、高い確率で保護者からも児童が称賛されます。

学校や家庭で認められる機会を増やすことで児童の行動をよい方へ導きます。

「○年○組のAさん、今朝も私にすてきなあいさつをしてくれたのよ。」

「□□先生のクラス、とてもよくがんばっていて、発表が多かった。」

「◇◇先生～、先生のクラスのBくん、今日はドリルタイムで計算問題を全問正解できていたね。」…

とある日の加茂小学校
ミーティングルームにて

## ベースライン（PBS取組前の記録）をとって取組前と取組後を比較する

**藍住北小学校**では、「次の授業で使うものを予め準備する」ことを目標に「藍北きらきらプロジェクト」に全校で取り組んでいます。その中でまずは実態を把握すべく、ベースラインをとりました。ベースラインの記録を取ることで、

①児童たちの現在の状態を客観的に評価できる。

②児童に対する仕掛けや指導が本当に有効だったかどうかを取り組み後の記録と比較することで検証できる。

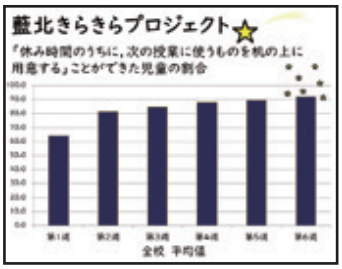
などのメリットがあります。

藍住北小学校では取組の記録や観察を組織的に行っています。表計算ソフトを用いて、係の教員がデータを入力すると各学級や全校の成果状況がグラフ化されるので、それに基づいた意思決定ができます。

ある学級では名簿を持って準備ができている児童の名前をすばやくチェックしています。

また、毎時間の記録は現実的でないので、「週二回、担任が最も都合がよい授業の始業時に記録をとる」ことを担任間で申し合わせました。藍住北小学校のような大規模な学校では、特に事前に何を観察するのか、具体的な項目について教職員間で共通理解することも重要です。

児童名簿に手早くチェックする




実際に使用したグラフ

## 観察のポイントや評価の基準をそろえ一貫した指導を行う

**三加茂中学校**では、「ロッカーの中や机の中を整理する」ことを目標に全校でポジティブな行動支援の考え方をベースにした指導を行っています。

取り組みを進める前に、まず生徒のロッカーや机の中の様子を観察しました。すると「ロッカーや机の中が整理されている状態」の基準には、教員間でも個人差があることがわかりました。

そこで個人差による指導のブレを小さくするため、左図のような共通理解の基準表を作り、教員間で共有しました。

教員間で共通理解した判断のための基準表

基準表があることで、観察がしやすくなり、生徒の行動を記録する際に、どこを見ればよいのかわかりやすくなりました。

三加茂中学校では、この基準表を生徒とも共有し、何がよいのか、何がよくないのか、ということを伝え、教える際にも活用しました。

ロッカーを整理する生徒たち

## 幼児・児童・生徒の望ましい行動を記録して、実態把握や意思決定、称賛に使う

**岩倉小学校**では、「あいさつ」の行動を記録しました。教員が朝の登校指導を行いながら、カウンターでよいあいさつをした児童の数を記録しました。

そしてポイントを押さえたよいあいさつができた児童の割合を示したグラフ（棒の代わりにスマイルで表示）を作りました。それを校舎内で最も児童がよく通る吹き抜け階段に掲示しました。

スマイルポイントによる記録

岩倉小学校のように、記録をすると①児童の行動の変化がつかめる、②さらなる改善や工夫を行うための目安となる、③称賛・承認の根拠になる、などのメリットがあります。

記録したことそのものが称賛・承認につながるような工夫もあります。加茂小学校でも、六年生が中心となって、「あいさつ」の行動を増やす取組を行っています。すてきなあいさつをした児童は、教員や六年生が、左の報告カードで記録することになっています。

さらにこのよい行動が記録されたカードは、放送委員会の児童へと引き渡され、給食時に校内で放送されます。そして、児童の担任の下へ返ってきます。

このような記録の工夫によって、すてきなあいさつをした児童は①その場で、②放送で、③担任等の放送を聞いた人から、④教員または六年生からも称賛されるのです。

報告カード

## やるほどにおもしろいPBS

**高川原小学校**では、本年度、大阪樟蔭女子大学の田中善大先生からアドバイスをいただきながら、授業づくりにポジティブな行動支援（PBS）の手法を活かすための取組を進めました。

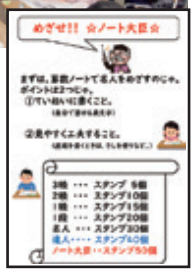
若手～中堅の五・六年生学級担任三名の方が算数科の授業でモデル実践を行いました。

笹川教諭

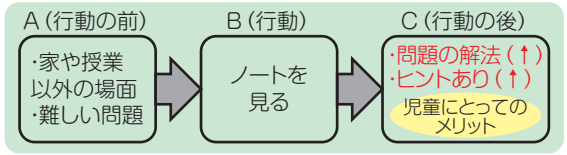
授業にもPBSを活かそうと思って、まず最初にしたのは、カウンターをもっての授業でした。担任している児童に自分はどれだけプラスの言葉をかけてPF（※ポジティブなフィードバック）をしているのかを確かめてみるところからのスタートでした。もっと多いと思っていましたが、結果は、算数で数回、得意な体育でも十数回でした。そこから意識してPFを行い、回数を増やしていくことにしました。「どうすれば多くPFできるだろうか」「PFするためにはどうしたらいいだろうか」と考えて授業を計画するようになりました。すると、だんだんと児童の「できていないところ」ではなく、「できているところ」を探すように変化してきたことに気付きました。【あの子、今日はノートを書いている】【話に頷いている】【ミスに気がついて直している】…そして、「いいね。」「がんばっているね。」と声をかけていくようになりました。

それまでは、自分のペースで授業を進めていましたが、児童のペースも意識するようになってきました。そして、この辺りから、自分が以前よりも授業を楽しめるようになりました。ちょうど、この段階でコンサルにより、田中先生から『褒めるときは、具体的に褒める』というアドバイスをいただきました。具体的に褒めることで、その言葉が周りの児童への指示にもなるということでした。実際に「何がいいのか」を言葉にして褒めてみると、効果大でした。「ほんまや！一人の望ましい行動を具体的に褒めたら、周りが真似をしてる！」そういう瞬間を何度も体感していると、自分でも「クラスの中で、プラスのサイクルがまわっているかも！」と感じるようになりました。そうなると、長々と「○○しなさい」、「△△するんだろ」と説明しなくても、「○○していこう」と短く言うだけで、クラス内で望ましい行動が増えていきました。

こうなると、望ましい行動を引き出すための【仕掛け】を考えるのが楽しいと感じるようになりました。仕掛けの指導を入れていく中で、児童が望ましい行動を行ったら、具体的に褒める。それを継続できるように、仕掛けをバージョンアップしていきました。その時のクラスの状況を見て、児童と相談しながら改善したことで、児童のモチベーションやクラスのみんなでチャレンジしているという意識が高まり、連帯感が増していきました。




児童と相談して作った掲示物




「ノートづくり名人」の仕掛け

## 「ノートづくり名人」の仕掛け

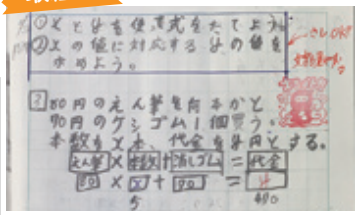
学習習慣や学力に直結してる！と手応えを感じたPBSの仕掛けは、「ノートづくり名人になろう」でした。ただ、丁寧に正確にノートを取るのではなく、家庭学習や復習に使える『参考書』のような役割をもつノートにしてほしいという思いもありました。普段から、「分からない問題があれば、まずは自分のノートを見て解き方や考え方を思い出そう。それでも分からないときは、ここまで分かったけど、ここからが分からないというように言って、先生や友達に聞こう。」と指導をしていました。そういう考えを田中先生とのコンサルの中で伝えると、【少し先（未来）の自分が見て、わかりやすいノートづくり】ということを教えていただきました。正にその通りでした。それからは、きれいなノートではなく、『自分が見てわかるノートづくり』へと移行していきました。

児童に渡した認定証カード

ノートチェックでオミゴトスタンプ（基準を満たす）をもらった児童の割合を示すグラフ

取組前

取組後



**ある児童の算数ノート**

「ノートづくり名人になろう」の取組前と取組後のノートです。具体的なメッセージを添えた丁寧なノート指導によって、見やすくわかりやすいノートになっています。筆圧の強さに、児童の自信が現れています。

そして、友達のしている工夫を見て、真似るために大きなきっかけとなったのが「ギャラリーウォーク」でした。また、「ワールドカフェ」をすることで、自分の考えに自信が持てたり、ミスに気付けたりと考えを深めることにつながっていると感じています。説明や発表にチャレンジする姿や、楽しいと感じている呟きが聞こえてくることが嬉しいです。

仕掛けをすると、何らかの望ましい変化が児童に起きたので、それを察知して、その時に褒める。それをするのが楽しくなりました。教員が楽しんでいるので、児童もその波にのってくれたのかなと思っています。一つの教科でPBSに取り組むと、他教科の授業時にも同じように「できているところ」を探して指導できるようになってきたかなと手応えを感じています。

**ワールドカフェの様子**
グループで考えをまとめ、複数の考え方を聞き、児童同士で説明を深めます。

**ギャラリーウォークの様子**
学級内を歩き、他の児童のノートに記された「考え」に触れたり、わかりやすくまとめられたノートに赤シールを貼ったりします。

## 実践者の言葉

### 授業の中でPBSを意識する

最相教諭

クラス全員が、授業に参加している意識をもつことができるように、授業の中でのPBSに取り組みました。普段の授業から、大多数の児童ができている行動を、具体的に褒めるように心がけています。「チャイムが鳴り終わる前に座れたね」「授業準備ができているね」など、児童にこうなってほしいと思うことは、できていない児童を叱るのではなく、できている児童を褒めることで、正しい方法を伝えています。すると、すごくいい雰囲気で授業を始めることができます。何よりも私自身が楽しく笑顔で児童と接することができます。

普段の授業で工夫したことは、常に児童の進度や理解度を確認することです。「ここまでノートを写せましたか」「なぜこうなるかわかりますか」など、児童との対話を通して確認しました。その際に、全員に挙手させることで、授業に参加している意識をもたせ、私自身もそれを受けて、授業の流れを修正していきます。自立解決が難しい児童には、いくつもヒントを与えることで、全員がゴールに向かっていけるように心がけました。

私は、授業でPBSを使い、児童の良い行動に目が向くようになりました。また、一部の児童だけでなく、全員の児童の状態を把握するようになりました。私は、常に児童に「ありがとう」という言葉を、意識して使うようにしています。児童の1つ1つの行動に対して、感謝の気持ちをもち、その行動が助けになっていることを伝えます。今まで、自分ができて当たり前だと思っていた児童の行動は、実は、児童の素敵な行動の一つであったことに気づかせてくれたのがPBSです。

### 授業中に児童の「発表」を増やす

山本教諭

授業をしていて、質問に対していつも手が挙がるのは何名かの決まった子どもであることが気になっていました。

私自身も、どんな声かけをすればみんなが手を挙げるようになるのだろうと悩んでいました。そんな中、算数の授業を中心に、子どもたちの発言回数を増やしたい、全員が何らかの反応ができる機会を増やしたい、と発表に焦点を当てPBSに取り組むことになりました。普段の授業の中で、めあてを全員で声に出して読むことを徹底したり、個別に当てる挙手に加え全員が挙手できるような場面を増やしたりしました。課題ができた人、まだ時間が必要な人、と確認の意味を込めて挙手をしたり、ペアトークやホワイトボードを使った学習を増やし自信をもって発言ができるようにすることで、子どもたちが反応を示すようになってきました。

さらに机間指導の時に、「この考え方すごい、手挙げて発表してな。」と声をかけたり、休み時間にも、子どもたちに「手挙がるようになったなあ」と発表の話題で話したりする機会を増やしました。すると、次の質問の時には手が挙がることが増えました。

実際にPBSに取り組んでみて、教員の声かけや少しの工夫で子どもたちはすごく前向きになり、頑張ろうとする意欲をみせてくれるなあとうれしくなりました。発表の記録を見ても最初と比べて手が挙がる子、発表ができる子がすごく増えてきています。高学年になるにつれて自分の思いを口にすることが恥ずかしくなってくるけれど、言いやすい雰囲気作りや少しの頑張りを見つけてすかさず承認し、頑張りを持続させていくことが大切だと感じました。

監修　田中　善大（大阪樟蔭女子大学准教授）

## 校内コーディネートにポジティブな行動支援のエッセンスを活かす

**加茂小学校**では、特別支援教育コーディネーターが中心となって、校内支援体制の強化にも「教員間での情報共有・共通理解」や「一・三層支援の充実」、「うまくいった手立ての共有」等ポジティブな行動支援のエッセンスを採り入れています。

安宅教諭

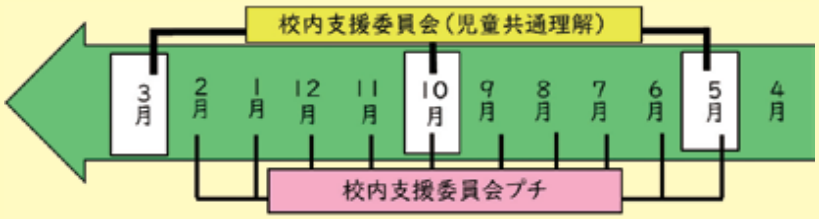
加茂小学校のPBSの取り組みは、本年度で五年目を迎えました。一層支援が整い、一・三層支援への取り組みを考えた時、「いつでも誰でも」使えるものにしようと思いました。

特別支援教育が専門でない人でも、「これがあればコーディネーターとしての仕事ができる」と思えるものの完成を夢見ていました。共通理解の指標として『支援ニーズ表』と『アイデア集』を活用し、共通理解の場として『校内支援委員会プチ』を続けることで、校内での支援の考え方も少しずつ統一されてきました。

以下の取り組みは、「いつでも」「どこでも」「誰でも」できるものだと思います。ぜひ、それぞれの学校に合った形にカスタマイズして子どもたちとの関わりの参考にしていただきたいです。

## 校内支援委員会(児童共通理解)

年に三回、学校全体で「児童共通理解」の時間を設定しています。支援ニーズに合わせた観点(学習、行動情緒、対人等)から、子どもたちの状況を把握しています。ここで使用した資料は学年ごとの支援ファイルに保管し、いつでも誰でも見ることができるようにしています。観点を揃えることで、知りたい情報を素速く探すことができます。また資料は、年三回定期的に更新し、そのまま引き継ぎ資料として使用しています。特別な引き継ぎ資料を作成する必要がなく、校務の軽減にもつながっています。




**ポイント**

①タイマーを使って時間を区切り短時間で開催
②一人ひとりの必要な支援や上手くいった対応を記載
③引き継ぎ資料として使用

## 校内支援委員会プチ

月に二回ずつ、低・中・高学年に分かれて情報共有の時間を設定しています。学年団の教員をはじめ、管理職、養護教諭、特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター等が参加し、学級内での困っていることや、特別支援についての情報を共有しています。

記録(プチ回覧用紙)を回覧し学校全体で情報を共有することで、学校全体で子どもたちを見守る意識の向上に役立っています。

記録は、学年ごとの支援ファイルに保管することで、いつでも誰でも見ることができます。次年度への引き継ぎとして、子どもたちの前年度までの状況を把握するために役立てることもできます。

**プチ回覧用紙**

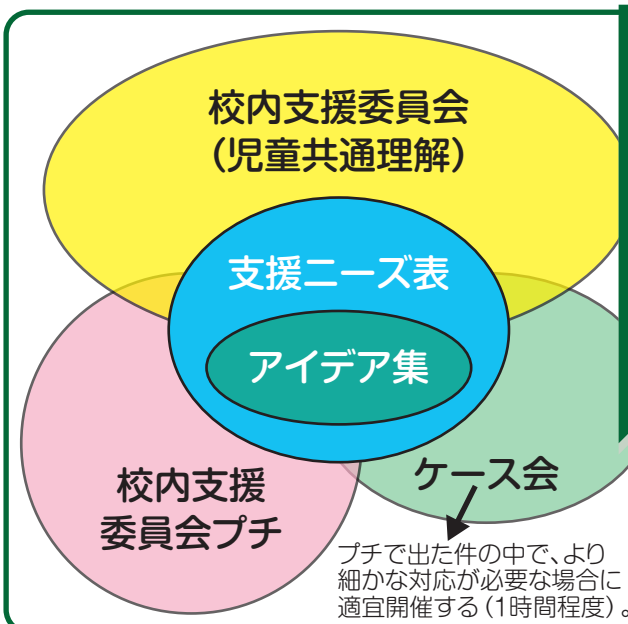
校内支援委員会プチ　○年　実施日 ○月○日

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 名前 1組 ○○ ○○ | 支援ニーズ 学習 | | 発信者 担任 | | |
| ・かけ算の筆算の方法が身についていないため、全体での学習進度についていくことが難しい。 | | 人 | プランニング | ケース会 | |
| | | ○ | | | |
| | | 計算の場面では、T2や支援員が先取りで声をかける | | | |
| 名前 2組 △△ △△ | 支援ニーズ 対人 | | 発信者 担任 | | |
| ・担任との毎日のふり返りで、行動が少しずつ落ちついてきた。 | | 人 | プランニング | ケース会 | |
| | | | ○ | | |
| | | ふり返りの期間を毎日から1日おきにするか、自分ふり返りをおこなう方法に変えていく | | | |
| 名前 1組 ○○ ○○ | 支援ニーズ 不登校 | | 発信者 保健室 | | |
| ・算数の前に「おなかが痛い」と言えて、保健室に来ることが多い。熱をはかると、納得して教室に戻る。算数にストレスを感じているのかもしれない。 | | 人 | プランニング | ケース会 | |
| | | | | | |
| | | 学級担任と連携する | | | |

**プチの特徴**

①時間が短い(十五分以内)
②立ちスタイルでコンパクト
③月に二回必ず開催
④その場で支援が提案できる
⑤記録を回覧(全校で共有)

## 加茂小の校内支援体制



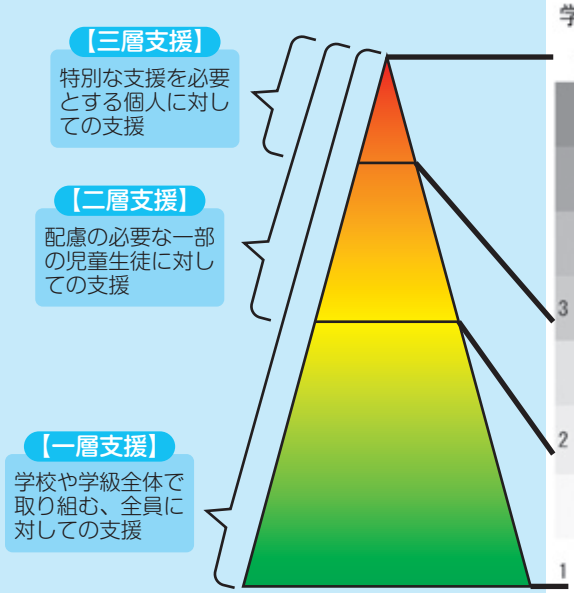

## 支援ニーズ表

『支援ニーズ』とは、「児童一人ひとりが必要としている支援や配慮のこと」です。

その時の状況や、環境(場所・関わる人等)、天気や教科によっても変化するものです。加茂小学校では、【学習】【行動情緒(対人等)】【行動情緒(不登校)】【生活】【家庭環境】の五つの観点に分けて支援ニーズ表を作成しています。日常の様々な場面で支援ニーズを確認し、子どもたちへの関わりのヒントとして使用しています。

### 支援ニーズ表のポイント

校内で共通の指標ができる
共通のイメージを持って
児童に関わることができる
適切な支援に直接つながる




### 支援ニーズ表

学習

| 層 | 状況 | 必要な支援 | 支援案 |
|---|---|---|---|
| 3 | ・教科書での学習が困難<br>・個別学習、個別の環境設定が必要 | ・支援学級在籍(特別の教育課程で学習を進める) | ・自立に向けた学習を中心にする |
| 3 | ・通常学級での学習が困難<br>・個別学習が必要 | ・支援学級在籍(個別のペースで教科書で学習を進める) | ・個別のペースで学習をする<br>・基礎基本を中心に学習をする |
| 3 | ・放課後+家庭での補充でも理解が追いつかない | ・通級指導教室(自立活動)の利用 | ・学習の基礎となる部分を自立活動で高める |
| 3 | ・放課後学習では授業内容の理解が追いつかない | ・家庭でもプリント等で補充学習→<校内体制><WISC等の発達検査を進める<br>→個別学習の場を提案 | |
| 2 | ・T2や支援員が隣についても授業内容の理解が難しい | ・担任が放課後学習(授業の補充)→<早期支援> | ・特別支援教育コーディネーターに相談<br>→Co.が授業観察して確認 |
| 2 | ・一斉指導で授業内容の理解が難しい<br>・ヒントがあればできる<br>・作業ペースが遅い | ・T2や支援員が隣につく、声をかける→<校内体制><br>・ヒントカードや視覚的支援→<視覚支援> | ・校内支援委員会プチ<br>→全体で把握<br>・ヒントカードを作成 |
| 2 | ・一斉指導が伝わりづらい | ・担任から個別の声かけ→<関わり><注目><br>・友達からの声かけ→<座席><br>・ペア学習、グループ学習→<注意コントロール> | ・座席の配慮(手本になる子の近くに) |
| 1 | ・一斉指導でOK | ・一斉指導<br>・全体への視覚支援(刺激の少ない教室環境等) | |

支援方法を より具体的に!

### アイデア集

学習・1層支援

| 状況 | 具体的な支援案 | | |
|---|---|---|---|
| ・一斉指導でボーッとしている<br>【聞く】<br>・たまに聞き逃しがある<br>・集中して聞いていればわかる<br>【話す】<br>・言いたいことをだいたい話せる<br>・「いつ」「どこで」などが言える<br>【書く】<br>・日記や作文などだいたい内容が書ける<br>・漢字の書きが、ほぼ定着している<br>【読む】<br>・教科書がスラスラ読める<br>・漢字の読みが、ほぼ定着している<br>【計算】<br>・既習学習がほぼ定着している<br>・文章題から立式できる | 座席 | A | 座席の配慮(手本になる子の近く、教師が声かけしやすい場所など) |
| | 関わり | C | できている時にすぐ褒める |
| | | A,C | 担任からの声かけ |
| | | A,C | 友だちからの声かけのシステム(グループ、ペア等) |
| | | A,C | ペア学習、グループ学習 |
| | | A | タイマーなどで時間を区切る |
| | 注目 | A | 話し始める時に、全員の視線が集まるまで待つ。 |
| | | A | 話し始める前の合図を決めておいたり、個別に声かけしたりして注目できるようにする。 |
| | | A | ダーチャレンジ、合図に拍手→タキリ 等。 |
| | | A | 注目していた方が良い場面設定(先出しジャンケンなど) |
| | | C | よく話を聞いている子を一番に褒める。それを見て聞きはじめた子を褒める。 |
| | | C | →さらにそれに気がついて教師の方を見た子を褒める。最後に一番はやく聞いてくれた子に「ありがとう」といってから、説明を始める。 |
| | 注意コントロール | A | 授業の途中で「動きているサイン」が出たら、脱線話をして、注意をリセットする。 |
| | | A,C | ペア学習や動きのある学習(単純作業でよい)を入れて、話したり動いたりして出力(考えを伝えるなど)する時間をとる。 |
| | | A | つまらない内容(抽象的、無意味)は頭に残らないので、子どもたちが体験したことがあることや想像しやすいものに置き換える。 |
| | | A | プリントを配る集める、コピーしに行く、黒板に書きに来るなど、動きを入れて気持ちをリセットする。 |
| | | A | 集中力トレーニング、聞くトレーニングなどで集中をコントロールする練習を行う |
| | | A | 基本的にヒントは大整腸る舞いで出す。 |
| | | A | つまずく前にヒントを提示 |

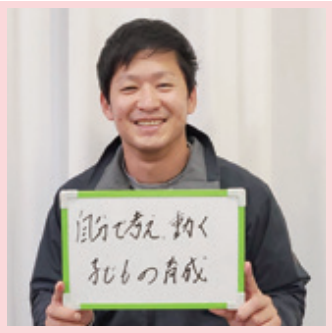
## アイデア集

支援ニーズ表を基に、子どもの状況を、より具体的に示し、どんな支援が考えられるかをまとめたものです。【学習】や【行動情緒(対人等)】等の観点別に分け、一層支援から三層支援までの三層構造で支援のアイデアをまとめています。

ケース会等で、現在の支援をふり返ったり、今後の支援を考えたりするときにも使用しています。

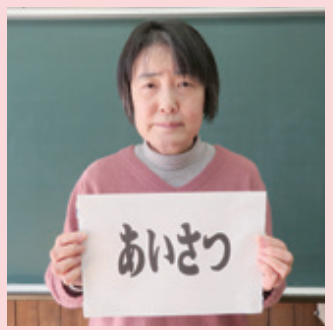
困った時に「いつでも」「誰でも」具体的な支援を参考にすることができます。

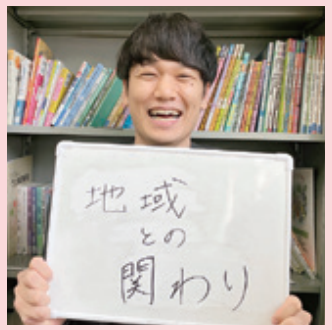
監修　田中　善大(大阪樟蔭女子大学准教授)



あなたは何にポジティブな
行動支援を用いましたか?

# 実践者のページ





## 徳島県内PBS実践者の先生方

## 実践事例の総括と今後の課題

ＰＢＳは単なる「方法論」や「プログラム」ではありません。ＰＢＳは、私たちの幼児・児童・生徒たちに対するかかわりをより良くするための「枠組み」であり、その枠組みは私たちの子どもたちへの基本的な「見方」や「考え方」をも変えうるものです。

本実践報告からも読み取れるように、実は学校現場でＰＢＳを推進していくことによって最初に変化するのは、教職員の行動です。教職員が変わることを通して、ＰＢＳは幼児・児童・生徒たちにも影響を及ぼします。教職員が幼児・児童・生徒の良い変化を感じ取ることで、支援がより洗練されたり、取組が定着化されたりするなど「ＰＢＳの好循環」が生まれるのです。

ＰＢＳの「Ｐ」は「Positive」の頭文字であり、そこには「ポジティブな行動を」「ポジティブな方法で」支援するという意味が込められています。

おそらく幼児・児童・生徒たちのダメなところをあげつらい、幼児・児童・生徒たちを叱りつけたくて教員になったという人は一人もいないと思います。しかし、多忙による余裕のなさ、「きちんと指導しなければ」というプレッシャー、「幼児・児童・生徒のダメなところを叱る」以外の対応方法を未学習であるなど、様々な理由によって、つい罰的な対応が行われてしまうこともあるでしょう。

しかし本事例集は、「教職員がチームとして目標を共有し、幼児・児童・生徒たちに必要なことを教え、達成を認め喜び合う」という教員本来の仕事を、ＰＢＳを通して教職員が自ら取り戻せるということをリアルに、そして躍動感を持って描き出してくれました。

徳島県における今後の課題の一つは「さらなる普及」です。そのためには気をつけるべき点がいくつかあります。ＰＢＳは「いつでも、だれでも実行可能」というものではあるのですが、「うまく実行する」ため、そして「持続的に実行する」ためには、いくつかの満たしておくべき条件があることがわかってきています。

その条件とは例えば、校内の適切なチーム編成・役割分担、定期的なミーティングの機会確保、研修機会の確保、記録を管理して活用するための仕組みづくり、教育行政や専門家のバックアップなどです。今後、このような条件をしっかりと整備しながら、着実に成果を拡げていくことが大切です。

また、取組に際しては、校・園内での話し合いによる丁寧な合意形成や目的・目標の共通理解が欠かせません。学校全体で取り組むＰＢＳにおいて決定的に重要なことは、そのような合意形成や共通理解を土台として前述した「好循環」が生まれるようにすることです。教職員一人一人にＰＢＳの意義について理解していただき、納得感を持った上で「実際にやってみたら良かった」という経験を積んでいっていただくことがとても重要なのです。

これからの徳島県の取組はさらに素晴らしい展開をみせてくれるに違いありません。教職員の皆さまが今以上に教員であることに喜びややりがいを感じ、教員という仕事に誇りを持てる学校を共に創っていければと強く願っております。

執筆　大久保　賢一（畿央大学准教授）

**特別支援まなびの広場へアクセス!**

https://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp/

特別支援まなびの広場　検索

詳しくは総合教育センターホームページ

**このような情報や役立つ教材・研修資料等を公開しています**

管理職・ミドルリーダー向け

SWPBSマニュアルの決定版

PBSを学級・学年で進めるときに

※これらのパンフレットも参考にしてください。

特別支援・相談課では、ポジティブな行動支援の浸透のため、各種セミナーやワークショップを開催しています。また、要請に応じて学校・園での研修も行っています。ご活用ください。

スキルアップセミナーの様子

要請訪問の様子

実践事例集についてのお問い合わせ　**徳島県立総合教育センター特別支援・相談課**

〒779-0108　徳島県板野郡板野町犬伏字東谷1−7　☎088−672−5200　E-mail　tokubetsushien@mt.tokushima-ec.ed.jp

■この実践事例集は、徳島県教育委員会「発達障がい教育・自立促進アドバイザーチーム」が執筆・監修しました。